

# 低コスト集団ソーシャルスキル教育が児童のソーシャルスキルと自己価値に与える効果

## Effects of Low Cost Group Social Skill Education for Social Skill and Self-Worth of Children

樋山 かほる (Kaoru Hiyama) 指導：菅野 純

### 問題と目的

近年学校が抱える課題にいじめ、不登校、暴力行為などの学校不適応が社会問題となっている。その要因の一つに小林(2009)は子どもを取り巻く環境の変化からくる対人スキルの獲得の難しさを指摘し、また菅野(2005)は学校教育でのソーシャルスキル教育(以下、SSE)の意義を説いている。

先行研究の数例を概観するとSSEの実施回数や指導者数が比較的多い傾向にある。学校現場では教育課程の時数や教師数に余裕がなく、教育課程外のSSE実施に多くの時数を割くことは難しいといえる。

そこで本研究では教育課程内の時数を最小限に抑えた低コストのSSEの効果を検討することを目的とした。

### 方 法

1. 調査対象：神奈川県公立小学校6年生2クラス65名  
統制群(A組)：男子17名・女子15名 計32名  
実験群(B組)：男子18名・女子15名 計33名

### 2. 手続き

(1) 実験と査定の流れ SSEの意味について→SSE45分＋リハーサルのみ10分(朝自習)を3セット実施した。

教育的配慮のため統制群については、実験群のSSE終了後、同一のSSEを実施しデータを採取した。

### (2) 調査材料

a. 学校生活アンケート(研究実施者が実態調査と標的スキル決定のため作成) b. 自分の行動を振り返るアンケート「配慮のスキル18項目」・「かかわりのスキル12項目」(4件法:河村,2000) c. 児童用コンピテンス尺度「自己価値」(4件法:桜井,1983)

### (3) 標的スキルと使用時間(学活の時間3h)

標的スキル:アサーション, 1回目:自習中の出来事(優しい言い方), 2回目:習字セットの貸し借り(上手な断り方), 3回目:清掃時間での頼みごと(上手な頼み方)

### 3. 分析方法

学校生活アンケートは集計後グラフ化した。また配慮のスキル・かかわりのスキル・自己価値の各得点に関して、条件(統制群・実験群)×時期(プレ・ポスト)とし2要因の分散分析を行った。

### 結 果

#### 1. 学校生活アンケートについて

実験群ではSSE実施後、女子において“上手に言える”と答えた割合が増加し学校生活に対してもすごく楽しいと答えた割合が20%増加したが、男子は同様の質問項目について改善が見られなかった。

#### 2. 配慮のスキルについて

配慮のスキルについては介入の効果は認められなかった。

#### 3. かかわりのスキルについて

かかわりのスキルのみに交互作用に有意傾向が認められた( $F(1,63)=2.95, p<.10$ )。そこで単純主効果の検定を行ったところ実験群において、プレからポストにかけて有意な上昇が認められた( $F(1,63)=4.89, p<.05$ )。

#### 4. 自己価値について

介入の効果は認められなかった。

### 考 察

学校生活アンケートにおいてはSSE後、実験群の女子の意識の改善が認められた。それは女子のポジティブな思考が関係していると思われる。男子で学校生活に対しての意識の改善がほとんど認められなかったが、アンケートの回答で言い方は練習してもうまくなならないと答えていたことから、男子の無力感の改善が今後の課題といえる。

配慮のスキルにおいては、第1回が高得点で伸びる余地がなかったこと、またSSEの学習方法が標的スキルの向上に結び付かなかったことなどが推測される。

アサーションのSSEによりかかわりのスキルに介入の効果は認められたことから、本研究の方法はかかわりのスキルアップに有効であることが窺われた。

自己価値においてはSSE後すぐには介入の効果は上がらないことやクラス内の人間関係も大きく影響し、さらに交絡要因も十分考えられるため、効果の検討のためにはフォローアップ期間を設ける必要があると思われる。

### 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題として、評定を児童の自己評定のみで行ったことがあげられる。今後は、教師評定などを取り入れ、より客観的なデータをもとに分析することが必要である。学校における子どもの社会性育成を意図した低コストSSEの効果向上のために、SSEとMSSEの組み合わせ回数や、標的スキルの選択と授業のあり方についてさらに知見を積み重ねる必要があるだろう。